



Discussion Paper Series

No.74

都市零細自営業家計と信用市場
—農村部門での研究蓄積からの展望—

成田哲朗

February 2005

**Hitotsubashi University Research Unit
for Statistical Analysis in Social Sciences**

A 21st-Century COE Program

Institute of Economic Research
Hitotsubashi University
Kunitachi, Tokyo, 186-8603 Japan
<http://hi-stat.ier.hit-u.ac.jp/>

都市零細自営業家計と信用市場*

―農村部門での研究蓄積からの展望―

成田 哲朗**

2005年2月

目次

はじめに

1. 都市と信用市場
2. 信用市場と信用制約
 - 2.1. 生産面での信用制約
 - 2.2. 消費平準化
 - 2.3. 消費を通じた生産面での効率性改善
 - 2.4. 信用制約と階層分化・不平等
3. フォーマル金融・インフォーマル金融の対峙から協同へ
 - 3.1. 従来型フォーマル金融
 - 3.2. インフォーマル金融
 - 3.2.1. 家族・親類・地縁等
 - 3.2.2. 専門的マネーレンダー・インターリンクージ
 - 3.2.3. 貯蓄・貸付グループ
 - 3.3. 新しい型の信用市場の創造へ

おわりに

補論 1. グラミン銀行と情報の経済学

補論 2. ROSCA (Rotating Savings and Credit Associations)

参考文献

* 本稿を執筆するにあたり、一橋大学経済研究所黒崎卓助教授には、有益なコメントを数多く頂いた。この場をもって謝意を表したい。無論、本稿においてあり得べき誤りは筆者自身の責任である。なお、本稿執筆と並行して、国際開発高等教育機構(FASID)よりフィールドワーク調査助成を得て、2004年10月にメキシコシティにて家計調査を行う機会を得た。同調査においては、本稿でまとめたアイデアを基礎として、都市部零細自営業家計の信用制約の問題、フォーマル金融・インフォーマル金融の活用状況等にアプローチした。同調査の分析結果は、別途、稿を改めて報告の予定である。

** 一橋大学大学院経済学研究科博士過程 E-mail:ged1404@srv.cc.hit-u.ac.jp

はじめに

開発経済学の文脈において、市場の不完備性は農業セクターの低発展と結び付けて考えられがちである。しかしながら、農村に多くの貧困層が堆積する一方で、途上国の大都市圏の周縁に堆積する貧困層もまた一つの顕著な現象である。これら貧困家計は地理的に大都市圏の周縁に居住していることが一般的だが、より市場経済化の進んだ大都市において、フォーマルな経済制度・システムからも周縁に位置し、零細な自営業経営に従事していることが多い。都市貧困家計と都市零細自営業家計は必ずしも一対一の対応関係にはないが、本稿は後者が前者の典型的な発現形態であるというスタンスからの記述である。

農村セクターにおける市場の不完備は、まさに市場そのものが存在しない、もしくは市場の発展が停滞している状況と典型的には考えることができよう。しかしながら、都市部では市場そのものは存在しているのであるが、一部の階層にとってはアクセスすることができない、という状況がより一般的である。程度の差はあるが、農村部での市場の失敗が **household-specific** かつ **region-specific** なものであるとすれば、都市部での市場の失敗は純粹に **household-specific** なものであるといえよう。

本稿ではそうした市場の不完備の一例として、信用市場を考察する。ここでいう信用制約とは、「フォーマル金融機関から借入を行いたいが、様々な要因から希望額の全部もしくは一部が借りることができない状態にあること」を指す。この定義における「様々な要因」とは、金融機関による拒否、担保資産の欠如といった要因のみならず、将来の返済に対する不安や、「拒否されるであろうから借入の申し込みすらしない」といった心理的要因、すなわち、**self-exclusion**、**endogenous preference formation** の要因をも含んでいる。また、全く借入をすることができない状態だけではなく、希望額と実際の借入額との間に乖離がある場合も信用制約として捉えるべきである。さらに、「借りることができない状態」とは、一時点のみで判断するものではなく、「現時点では借入を行っていないが、今後の何らかの資金需要に対して、自己資金やフォーマル金融からの資金調達の見込が立たないような状態」といった、より広いタイム・スパンでの状態も想定している。

途上国の都市の信用市場に関する研究はまだ量的に少ないので、農村信用市場の分析が示唆する所を可能な限り都市のコンテキストと比較しながら考えることとする。途上国の都市部零細自営業家計に関して、信用市場との関連からの展望論文をこのような形でまとめたものが日本語でも英語でもないため、その部分を補うことが本稿の第一の意義である。

また、本稿では重要な展開として **ROSCA** やマイクロファイナンスに着目しており、後者に関しては筆者がメキシコのフィールドで観察した事例が報告される。低所得者層の金融取引に対する態度・慣習を理解するには、地道なファクト・ファインディングの積み重ねが大変有用だと筆者は考えているが、それへの貢献が本稿の第二の意義である。

以下第1節では、都市部門で信用市場を考えることの意義を考察し、農村部門との対比の中で、都市独自の論理が機能していることを指摘する。そこでは、都市人口比率及び都市

部における零細自営業者数のうえで、他地域に比べ非常に問題が切迫しているラテンアメリカ地域を念頭に議論する。第 2 節では、途上国の信用市場の特徴を概観する。消費面・生産面での信用へのアクセスの欠如がいかなる影響を各家計に及ぼすかを理論面でのサーベイを踏まえつつ、それを都市部門での零細自営業者のケースへと論点を誘導する。第 3 節では、信用制約を緩和すべく導入・考案された様々な取り組みをサーベイし、主に農村地域で試みられた施策からの都市部門へのインプリケーションを導き出す。そこでは、従来「非効率的」として積極的に扱われることのなかったインフォーマル金融の役割の再評価もなされる。最後にまとめと今後の課題を記す。

1. 都市と信用市場

農村部における人口圧力、限られた雇用機会など、都市部への人口移動を引き起こす要因は様々である。しかしながら都市で安定的な雇用を得ることは非常に難しい。情報の不足や人的資本の不足から、労働市場へのアクセス自体に制約を受けるが、そもそもの生存基盤としての居住場所すら、安定的に公共サービスが供給されない地域である場合が多い。そのように生活基盤が不安定であっても、各家計は生存のために何らかの経済活動を行わねばならない。ここに零細自営業の成立をみる。限られた人的資本・技術・市場情報など、零細自営業家計の経済活動を分析する際、着目すべき点は非常に多い。考えられうる様々な制約条件の一つとして信用制約があり、その重要性は衆知の通りである。

信用制約という言葉で零細自営業家計にアプローチするとき、一般に「生産面における制約条件の存在」というイメージが中心となる。ところが、零細自営業を営む家計というのは、生産活動を行うユニットであると同時に、財やサービスを消費し効用を得るという消費活動を行うユニットでもあるのである。容易に想像がつくように、これらの家計が様々な市場の不完備に直面しているとき、この状況は非分離型ハウスホールド・モデル、つまり生産面での意思決定と消費面での意思決定が不可分となるパターンであると考えられる¹。

このとき、信用市場へのアクセスの欠如が、生産面・消費面での意思決定それぞれに影響を与えるだけでなく、消費面での意思決定が生産面での意思決定にも大きな影響を与えることとなる(図 1-1、1-2 参照)。よって零細自営業家計を分析する際、生産面のみにおけるクレジットの入手可能性という視点を超えて、消費面での信用アクセスの問題をも明示的に取り入れたアプローチがなされなければならない。

ところで、都市人口比率という観点から見たとき、ラテンアメリカ地域は他の地域と比べて非常に特徴的である。膨大な人口の都市流入という局面は終息したものの、都市部で再

¹ ハウスホールド・モデルに関しては、Sadoulet and de Janvry [1995:ch.6]、Bardhan and Udry [1999:ch.2]、黒崎[2001]、黒崎・山形[2003]などを参照。

生産される人口数に比して、都市部門が提供できる雇用機会は限定的であり、それゆえに堆積・再生産される都市零細企業家計群はこの地域の持つ一つの共通項となっている。

これらの家計は「インフォーマル・セクター」という範疇に分類され、「フォーマル・セクター」との対置の中で、その存在が解消されるべきものであるかのごとく考えられてきた。しかしながら、それらの存在をマイナスに捉えるのではなく、逆にフォーマル・セクターで吸収しきれない部分の労働者の受け皿として、そして、将来的に地場で中小企業へと発展する可能性を秘めた予備軍として捉える傾向が強まり、そのようなダイナミックな展開が可能となるためには、彼らのどのような経済的制約条件が優先的に緩和されなければならないかが、より積極的に議論されるようになった。

このように、かつては都市零細自営業家計の堆積は、「解決されるべき問題」という視点からアプローチされていたが、今日ではこの部門が果たす社会的・経済的役割が正当かつ積極的に評価されるようになってきている。とりわけ雇用吸収と GDP に占める割合という観点からすれば、都市零細自営業家計の活動環境を整備し、生産基盤をより強固なものにする政策の方向性を米州開発銀行等が提唱しているのももったもなことである²。

以上のコンテキストにおいて注目を集めている政策が、包括的なサービスを行う金融システムの構築である。しかしながら、あらゆる意味で都市貧困のコンテキストにおいて新たに金融サービスを提供するという事は容易ではない。既に農村部門の信用制約に関する研究、及びそれを緩和するための実際的取り組みは膨大な数にのぼる。しかし当然のことながら、都市は農村とは異なった論理で動いているのであって、それらの研究・事例蓄積からのインプリケーションを盲目的に都市零細自営業家計の信用制約の問題に当てはめることはできない。

その一例として情報フローの U 字カーブという考え方がある(Ray[1998:ch.14])。経済発展の初期においては、コミュニティーが経済活動の基盤であり、そこではメンバー間で多くの情報が共有されるために、何らかの信用取引においてデフォルトをすると、たちまちその情報がコミュニティー内に行き渡り、信用を失った家計はその後新たにクレジットを

² 「1970 年代になって、国際開発援助機関の間で過去 20 年間の開発政策への見直しの機運が高まった。過去十数年間の都市・工業化中心の開発の結果、都市部への人口集中とスラム増殖、農村の停滞と貧困等の問題が無視できないほど深刻化していたからである。… ILO は 1969 年に世界雇用プログラムを設立し、7 カ国へ調査ミッションを派遣した。その代表的な成果であるケニヤ・レポート(1972 年)が転換点となり、途上国雇用問題政策の重点は、「失業」そのものではなく、インフォーマル・セクターに吸収されている膨大な「働く貧困層 (working poor)」の状況改善へとシフトした。このインフォーマル・セクターは、伝統的かつ労働集約的な都市部の製造業、サービス業及び農村における非農業活動であり、①参入の容易さ、②地元の資源活用、③規制のない競争的市場、④学校外教育で修得しうる技術、で特徴づけられる。このセクターが常雇用に大きく寄与しており、自給自足的農業よりは良い賃金であることから、ILO はもっとこの部門に好ましい政策を採ることを提言した。すなわち、行政組織がインフォーマル部門から財とサービスを購入したり、スラム撤去の政策を見直すといったことである。」岡本他[1999]。

得にくくなる可能性が高い。他方、高度に発展した経済では人々の経済活動範囲は限りなく大きくなるが、信用取引の情報は各種金融機関の間で高度に発達したネットワークを通じて共有されるために、やはり一度デフォルトするとその後の借り入れ等が非常に困難になる。ところがその中間に位置する発展段階では、どちらの情報共有システムも十分に機能しないので、多数のクレジット提供主がいるところでは、ある貸手に対してのデフォルトの情報が他の貸手に十分伝えられず、借手の側に戦略的デフォルトをする誘引が生じるのである。つまり、経済の発展段階に応じて、デフォルトに関する情報伝達・共有度は U 字型をたどるのである³。本稿で考察しているような都市周縁部というのは、人の出入りも激しく、また多くのプロジェクトが同時並行的に行われているので、まさにこの U 字カーブの底辺にあると考えられる。そこでは戦略的デフォルトが最適な道になり得てしまうのである。

いかにして戦略的デフォルトを防ぐか、いかにして借手の側に返済のインセンティブを構築するかという点は、農村部でも抱える共通の難問であるが、つまるところその問題は零細の自営業家計・農家における担保資産の欠如という状況から発している。担保なしで、いかにしてこの難問を解決するかにイノベーションが求められているといっても過言ではない。

一方、わずかではあるが何らかの資産を有している家計の場合であっても、都市と農村では異なった状況が生じ得る。例えば、Bardhan and Udry [1999:ch.7,11]、Feder [1987]、Feder and Onchan [1987]、Gavian and Fafchamps [1996]、Seligson [1982]などでは、土地改革等に伴う土地所有権(land title)の付与が、“collateral effect”を通じて各種信用制度へのアクセスを可能にし、より効率的な生産の達成、及び貧困緩和を促すとしている⁴。しかしながら、農村部を念頭に置いたこれらの議論は、都市というコンテキストでは以下の点において所期の効果を発揮しないと考えられる。

零細自営業家計が居住、もしくは「占拠」している土地の所有権が明確に与えられたとしても、貸手の側はそれらの担保に対して借手が考えている価値よりは低い価値しか認めない可能性が大きい。なぜなら主にこういった家計の居住区は社会インフラの不十分な都市の周辺に位置していることが多く、担保に設定された土地をデフォルトの際に受け取ったとしても、農業のケースとは異なり、貸手の側はそれを有効活用できないからである。結局その融資申込は却下されるか、非常に不利な契約条件を提示されることとなろう。

他方、信用供与プログラムを実施するに際して、都市の方が農村よりも好ましい環境を与えている点もある。その一例として、都市では“covariate risk”が小さいということが挙げられよう。つまり、家計間の生産サイクルが一樣ではなく、所得変動の相関が小さいということである。農村部門では農業生産が主たる活動となるわけだが、生産サイクルはほぼ一

³ この情報フローの U 字性は Hoff and Stiglitz [1990]でも示唆されている。

⁴ しかしながら、土地改革は大変な政治的エネルギーが必要であり、既存の政治枠組みの中では短期的にも長期的にも達成されることは期待できない。

様で、天候等の影響はコミュニティーレベル・地域レベルでのショックを引き起こす。このとき、資金需要が一時期に集中することとなり、各種金融仲介メカニズムは機能しなくなってしまう。都市では生産サイクルは非常に多様であり、天候要因も農村に比べればそれほど決定的なものではないといえよう。

また、Bell [1988]は情報の非対称性との関連で、農村ではどちらかといえばモラル・ハザードの問題の方に、都市においては逆選択の問題の方に重点が注がれるべきであるとしている。

信用市場の研究において、農村を扱ったものの方が圧倒的に多いということを考えれば、本稿の目的はそういった研究蓄積の中から都市への応用が可能なものを拾い上げつつ、都市のコンテキストからそれらを読み替えていく作業であるといえよう。

2. 信用市場と信用制約

前節で述べたように、信用市場を典型例として、様々な形の市場の不完備に直面している都市零細自営業家計においては、生産面および消費面での意思決定が不可分ではなく、図1-1、1-2の如くそれらが相互に関係している。このとき、生産面での効率性改善等のみを念頭においたアプローチは問題の一面を捉えているに過ぎず、そこから導き出される政策的インプリケーションは、必ずしも所期の厚生水準改善をもたらすことにはならない。信用制約の緩和が生産・消費両面にもたらす意義、そしてさらにはそれが異時点間・世代間レベルにまで影響しうる意義を鑑み、今一度論点の整理をしておくのが第2節の目的である。

以下の議論の構成は①生産のための資金調達と信用制約②消費平準化と信用制約③消費平準化を通じた生産面での効率改善④異時点間・世代間レベルでの不平等・階層分化と信用制約の4点からなる⁵。これらの議論においてレビューされる先行研究は主に農村部門を対象とするものであるが、都市零細自営業家計の分析への展望を与えてくれよう。

2.1. 生産面での信用制約

都市零細自営業の生産サイクルは、一般に農業の生産サイクルよりも短いと考えられる。したがって、前者に属する家計は後者に属する家計よりも頻繁に投入財を調達するための資金需要をやりくりしなければならない。手持ちの資金が潤沢であれば、最適生産規模を

⁵ 黒崎・山形[2003:第4章]での議論展開に依拠。

達成するために必要な投入財を調達することができる。しかしながら、都市零細自営業家計というのは往々にして潤沢に資金を持ち合わせているわけではなく、外部から資金を借入れることも容易ではない。

このように信用制約に直面している家計は、最適な生産規模を達成することができない。例え信用制約下でない家計と同じ生産技術を有していたとしても、同レベルの生産規模が達成できないのである。場合によっては、ある部門に参入するのに必要な固定費用すら手持ちの資金で賄えず、個人の適性とはかけ離れた活動に身を置かざるを得ないかもしれない。

以上のようなストーリーは非常に基本的なもので、理論的説明も非常に多くのところでなされているので、これ以上詳しく論じることはせず、以下に実証面における方向性の一例を挙げるにとどめておく。

生産面での信用制約緩和プログラムの効果を考察する際、そのプログラムへの参加家計のデータのみから参加前後の比較をしたり、プログラムの受益者となった家計とならなかった家計との比較をしたりしがちであるが、本来比較すべきは、①プログラムへ参加することを選択し、実際に受益者となった家計が、仮に受益者となっていなかったであればどうなっていたか、あるいは、②プログラムへの参加の選択肢を示されたが参加しなかった家計が、仮に受益者となっていたであればどうなっていたか、である。プログラム参加がランダムに決定されていれば、プログラムの受益者となった家計とならなかった家計との比較によってこの効果は容易に判明するが、通常はランダムではない。そこで **endogenous sample selection bias** を考慮したモデルが選択される必要が生じるのである。

また、実証レベルにおいて、一般に入手可能なデータからでは、どの家計が実際に生産面での信用制約に直面しているのかを判定するのは難しい。そのような場合、資産所有などの観察可能な変数からまず各家計がどちらのグループに属するのかを推計し、その後プログラム効果を表すダミー変数を含んだ回帰式を推計する **Switching Regression Model** という方法がある。

2.2. 消費平準化

零細自営業家計は消費主体でもある。では、消費のためのクレジットが得られないという意味での信用制約とは、どのようなことを示唆するのであろうか。

議論を最も単純化して、2時点間の資源配分問題として消費のためのクレジットの役割を考えるのが典型である。つまり、横軸に今期の所得額・消費額、縦軸に来期の所得額・消費額をとり、原点に凸な無差別曲線⁶及び予算制約式を用いて、クレジットへのアクセスが

⁶ 原点に凸ということはすなわち、2時点を通じて消費額に偏りがあるよりは、バランスが取れているほうを選好するという姿勢をあらわしている。極端な所得＝消費の変動、とり

効用を改善するという議論である。

売上げが好調であったときに貯蓄をし、逆に不調であったときにそれを取り崩して消費額の不足を補う、もしくは将来の売上げを担保に借入れを行う、という意味での信用・貯蓄メカニズムが整備されていれば問題はない。こういったメカニズムへのアクセスが欠如している状態を考えるのが本節である⁷。

ところで、冒頭で述べたように、フォーマルな金融機関の「不在」は、農村では家計レベルかつ地域レベルであるが、都市では純粹に各家計レベルでの問題である。金融機関そのものが実際に存在するにもかかわらず、小口の預金は拒否されたり、高い機会費用⁸、煩雑な書類等が障壁となって、事実上アクセスが閉ざされている家計が少なくない。

消費のためのクレジットへのアクセスがない家計がとる行動として、まず考えられるのは「タンス預金」のようなものである。しかしながらこの戦略は非常にリスクである⁹。なぜなら、途上国経済を考えた場合、インフレにより実質収益がマイナスとなる可能性が大きいからである。また、金融機関にではなく手元に資金があるということは、本来の目的とは異なった使途・消費圧力に常にさらされることを意味する。女性が自宅に貯めておいたお金を夫が遊興費として支出してしまう、というエピソードはよく語られる所である。さらに、都市インフォーマル・セクターが堆積している地域は往々にして治安面で問題を抱えていることが多い。自宅にお金を置いておくというのは盗難に遭う危険性が高く、できれば避けたい戦略である。

それでは金融機関へのアクセスがない家計は、余剰の資金が生じた場合、それをどこにどのような形で蓄積するのであろうか。金融機関へのアクセスがないということはつまり、預金口座のように比較的流動性の高い資産の形で、余剰金を蓄積する手段を持ち合わせていないということである。結果として、流動性の低いものへの資産投資をすることとなる¹⁰。この場合、家計レベルで緊急の流動性需要が生じたり、格好の投資機会が訪れたりしても、その資産を売却して資金を手にするまでに時間がかかり、経済的機会・危機に敏感に反応

わけネガティブなショックによる所得の落ち込みは死活問題に直結する。それゆえ原点に凸という無差別曲線は妥当な想定である。

⁷ この場合、コミュニティーレベル・地域レベルで見れば、資金余剰が生じている家計から資金需要を持っている家計への資源分配が達成されていないということである。

⁸ 「市場が活発で収入機会の多い都市部では、短期運転資金の需要が高く、日銭収入の管理・運営を行うためにも、頻繁な取引が必要となる。しかし、外部からの雇用者をもたないような零細事業主にとって、そのために遠くの銀行に交通費と時間をかけることは、その間に収入の機会を犠牲にすることになる」(岡本他[1999])。

⁹ Holt [1994]。

¹⁰ Holt [1994]は流動性の低い資産の例として家畜や宝石を、Besley [1995]はそれ以外に土地を挙げている。Rosenzweig and Wolpin [1993]は家畜の購入にまで貯蓄の概念を広げて分析を行った代表例といえよう。これらの文献は主に農村を念頭に置いたものであるが、都市のコンテキストにおいては、宝石・土地(転居用)・耐久消費財という形態をとる。ここで注意しておきたいのは、予備的動機からの資産購入が、一方で零細自営業経営において投入財として用いられる可能性があることである。

することができないという事態に陥るのである¹¹。

ところで、消費平準化は **ex-ante** の平準化と **ex-post** のそのの 2 タイプに分けられる¹²。前者の消費平準化は、次節で議論されるように所得平準化を通じて達成されるものである。一方後者は、ここで議論したような消費のためのクレジットを通じて、もしくはリスク・シェアリング機能としての保険市場を通じて事後的に達成されるものである。本稿は信用市場に主たる関心があるので、ここまでに議論したように主に消費のためのクレジットへのアクセスという観点から、消費平準化を取り扱った。しかしながら、非常に不安定な環境での生産活動を強いられている零細自営業家計は、常に様々なリスク・不確実性に直面しているのであって、それらを緩和するリスク・シェアリング機能としての保険市場の分析も欠かすことはできない。

Townsend [1995]は、所得変動を個人・家計レベルでのショック、地域・コミュニティーレベルでのショックとに分けて、リスク・シェアリングの機能と限界を考察している。都市部では天候による所得へのショックは農村ほどではないものの、一般的に零細自営業家計が堆積している地域は自然災害等に脆弱で、かつ地域単位で政府からの立ち退き圧力にさらされる等の問題を抱えているため、調査の際は個別の家計を超えたレベルでの所得減退要因の有無を確認する必要がある¹³。

しかしすでに述べたように、本稿は信用市場を主題としているため、これらの点は今後の研究の課題とし、稿を改めて議論することとしたい¹⁴。

2.3. 消費を通じた生産面での効率性改善

図 1 でみたように、典型的な零細自営業家計というのは、生産面での意思決定を行うユニットであると同時に消費面での意思決定を行うユニットである。非分離型ハウスホール

¹¹ Besley [1995]は、貯蓄だけでは変動する所得に対し部分的にしか平準化機能を果たさないとして、補完的メカニズムとしての様々な“nonmarket institutions”の存在に着目し、それらの考察を行っている。本稿では Besley の言う“nonmarket institutions”は、第 3 節での議論の対象である。また、Morduch [1995]は、「例え発達した信用市場が存在していなくとも、家計は資産の蓄積・取り崩しや非市場的メカニズムを活用して、ある程度の消費平準化を達成している。フォーマル信用市場が不完備であるような状況で、途上国の個人・家計は自らを防御する術を創造するのにおいて非常にイノベーティブである」と述べている。

¹² 澤田[2003]も参照。

¹³ Binswanger and Rosenzweig [1986]も参照。

¹⁴ Besley [1995]は、リスク・シェアリングとクレジットは密接に関連しているため、それらを截然と区別することは容易ではないと述べ、リスク・シェアリングへのアクセスが限られているとき、クレジット(ex-post consumption credit)は“insurance substitute”であるとしている。Udry [1994]はさらに一歩踏み出し、貸手・借手の将来の状況に応じて返済が調整されることが予め相互に了解されている、保険の機能を持った信用供与をモデル化し、それを state-contingent loan と呼んでいる。

ド・モデルの考え方を再び用いれば、生産者としての意思決定に、消費活動からの影響が及んでくる、というのが市場の不完備に直面した零細自営業家計であった。ここまで生産面・消費面を別個に取り扱ったが、それらのリンクを考える本節こそ、零細自営業家計にとっての信用市場を分析する際、最も興味深いインプリケーションを与えてくれよう。

前節で消費活動と信用市場の関係を考えた。所得の変動にさらされている零細自営業家計は、信用市場・保険市場へのアクセスがあれば事後的に消費平準化が可能となり、効用水準が改善する。しかしながら、信用市場へのアクセスがなく、自らの貯蓄やインフォーマルなシステム等を最大限活用することで部分的にしか消費平準化を達成することができない、というのが前節の議論から浮かび上がってくる家計像である。以下ではまず、こういった事後的メカニズムを通じての消費平準化が、完全には達成されえないことを考慮した場合、各家計が生産過程でとる戦略とはどのようなものを概観する。続いてその戦略に内在する間接的コストを議論する。

事後的消費平準化のための手段に限りがあるような状況下でも、消費量の大幅な変動を回避したいと考える家計は、事前の消費平準化(ex-ante consumption smoothing)戦略、すなわち所得平準化(income smoothing)行動をとる。消費量を事後的に平準化できないとき、消費支出の源泉となる所得そのものを平準化しようとする戦略である¹⁵。

では、所得の平準化とはどのようにして達成されるのであろうか。通常、既存の生産技術を継続活用したり、経済活動を多様化したりすることでそれは達成されると考えられる。新技術の導入には、様々な情報や技術が求められるが、それらが欠如していると、深刻な所得＝消費の落ち込みに直面するリスクが高い。また、新技術等への生産投資の結果が現れるまでにタイムラグを伴うとき、消費のためのクレジットが入手不可能ならば、その成果が生じてくるまでの間は低い消費額を耐えねばならないかもしれない。低所得層においてはこのときの消費額が生存水準を下回りかねない。

他方、規模の経済が働くような活動であっても、単一の活動に利用可能な資源を投入してしまうと、何らかの経済的ショックに見舞われ、その活動からの収益が極度に落ち込んだとき、絶望的な消費額を受け入れざるを得なくなってしまう。

したがって、新技術の採用や利用可能資源の集中によって、期待所得の増加が見込まれるとしても、消費面での信用制約や保険市場の不完備を導入すると、低位安定的な所得をもたらす伝統的な生産活動を複数個を組み合わせる所得平準化戦略が「合理的」戦略となるのである¹⁶。

この所得平準化は ex-ante の戦略であるがゆえ、データ等の客観的事実からはその実態を

¹⁵ Morduch [1995]参照。ちなみにここでの議論は、事後的な手段を有している家計が、事前の消費平準化戦略を採らないということの意味しない。

¹⁶ 以上のように、家計が新技術の採用を思い留まったり、新しい経済的機会のアドバンテージを逃したりするとき、そのことのコストは時間を通じて累積していくという点にも留意。すなわち、既に存在する不平等をさらに拡大する危険性をはらんでいるのである。

つかむのは非常に難しい¹⁷。Morduch [1995]で述べられている通り、「クレジット・保険の役割が非常にクローズアップされているが、**income generation**のプロセスで既にリスクが回避されたものが選択されている」のである。したがって、事後的消費平準化を可能にするようなメカニズムを整備することは、単に消費レベルでの効用改善にとどまらず、生産面での新技術採択や経営資源の集中を通じて、生産効率をも改善しうるのである。

消費平準化のための市場が完備していないとき、リスク回避的行動は家計の所得獲得活動の構成に影響を与えるのである。都市零細自営業部門は様々な活動領域から構成されており、複数の活動を同時に行っている家計が少なくない。これらの家計で選択されている経済活動が、その所得変動において相関の低いものの組み合わせからなっている可能性が考えられるが、この点については、都市部におけるより詳細な調査・研究が必要である。

さて、消費平準化・所得平準化を考える際、その「間接的コスト」をも考えなければならぬ。すなわち、消費面での信用制約を通じた生産面での間接的なコストである。消費が平準化されず、恒常的に十分な健康・栄養状態を維持することができないとなると、生産活動において効率的な労働力たり得ないであろう(効率賃金仮説)。また、事後的に消費を平準化するメカニズムを持ち合わせていない家計では、負のショックに対して資産の切り崩し・労働供給量の調節等を通じてそれに対処しようとするが、流動性の低い資産形態での蓄積を行っているこういった家計にとって、まず切り崩す資産は子供の将来の人的資本、すなわち教育である。直接的・間接的コストのかかる学校教育から子供をドロップ・アウトさせ、場合によっては労働供給量の調整に用いるのである。このとき、消費面での信用制約が緩和されるならば、子供の人的資本形成を通じて長期的観点での生産の効率性改善が期待されよう¹⁸。

2.4. 信用制約と階層分化・不平等

ここまでの議論は、すでに零細自営業を営んでいる家計の信用制約の問題を考察した。本節では問題の設定を入れ替え、信用制約に直面する家計は果たしてどのような階層に属することになるのかを考える。すなわち、信用制約に直面している家計は、零細自営業への参入を含めた複数の選択肢から、(自発的・非自発的を問わず)いずれを選択することになるのかを考察した研究を簡単にレビューする。

Eswaran and Kotwal [1986]は、土地の所有量に応じて信用へのアクセスが制約を受ける、

¹⁷ 数少ない研究の中で、Kurosaki and Fafchamps [2002]は、消費平準化の内生性を考慮した理論モデルに基づき、農家が農業生産の作付決定を通じて所得平準化を行うメカニズムについて、パキスタンの農家データを用いて実証的に明らかにしている。

¹⁸ 信用市場の不完全性と人的資本蓄積としての子供への教育投資の関係を論じているものとして、Jacoby and Skoufias [1997]参照。

外部から労働者を雇用した場合モラル・ハザードの問題があるので雇用者自身が監督しなければならない、という 2 点を仮定したとき、信用へのアクセス度が農業生産組織の選択に影響を及ぼすとしている。

土地の所有量に応じて信用へのアクセスが制約を受けるという考え方は、第 1 節で取り上げた土地改革に伴う土地所有権の付与という考え方に通じるところがある。つまりは資産配分の不平等是正政策といえよう。初期の資産配分の不平等と信用制約を扱ったものとして Banerjee and Newman [1993]、Galor and Zeira [1993]、Ray [1998:ch.7]、Mookherjee and Ray [2003]などがある。投資の「非分割性」(まとまった額を一度に投資しない限り投資からの収益がない)を考慮すると、信用市場が不完全である限り、初期の不平等が永続することを世代重複(overlapping generations)モデルを用いて示している。このことは資産配分の不平等が顕著なラテンアメリカを考えるにあたり、非常に示唆に富む結果であるといえよう。

しかしながら、いくつかの点でこれらの議論の前提条件の妥当性を問わねばならない。例えば Banerjee and Newman [1993]では、外部労働市場への参加と自営業経営という兼業形態の可能性を捨象してしまっている。ラテンアメリカの都市部の現実としては、外部労働市場で働く機会があってもそこで働かせてもらえる時間数及び得られる所得は十分ではなく、それを補う形で自営業経営を並行的に行う家計が少なくない。

また、Banerjee and Newman [1993]では、企業活動の結果としての収益が確率変数であり、家計の階層間移動が生じるとしているが、一方 Galor and Zeira [1993]ではそれを確率変数として扱っておらず、各家計が結果として属する階層は初期分布に大きく依存することとなり、長期的には階層間移動が生じないモデルとなっている。この点については果たしてどちらがより適切であろうか。零細自営業活動の収益の不確実性がどの程度のものなのかを考えてみる必要があるかもしれない。

ここでの議論が都市零細自営業家計そのものの分析にどこまで有効かは、今後より詳細にこれらの研究を検討する必要があるだろう。しかしながら現時点で言えることは、いくつかの側面に複合的に取り組んだこれらの研究は、理論と都市部零細自営業家計の現実の間隙を埋めていく今後の作業にとって、非常に示唆に富んだものであるということである。

3. フォーマル金融・インフォーマル金融の対峙から協同へ

本節では、実際に途上国においてどのように信用市場が機能しているのかをレビューする(表 1 に示された、メキシコにおける零細企業設立の際の資金の入手ルートに関するデータも適宜参照)。

まず、開発経済学の流れとともに、1970 年代ごろまで主流を占めた農業セクター向けの低利融資政策を概観し、それが失敗に至った理由をレビューする。貧困緩和という理念と、

低利のクレジットへのアクセス付与という戦略は、政治的な思惑からも短絡的に結びつきやすいものなので、過去それが農業セクターで失敗したという事実を注意深く観察することは、同じ過ちを都市で繰り返さないためにも非常に重要である。

続いて途上国政府や開発援助機関による金融サービス提供とは異なる、伝統的・在来的な様々なインフォーマル金融を取り上げる。第2節で述べたように、途上国の零細自営業家計にとって、信用へのアクセスの欠如というのは生産面・消費面で非常に大きな制約になってくる。しかしながら、フォーマルな金融サービスへのアクセスがないとしても、これらの家計は通常何らかの形で日々資金の融通を行っているのが常である。こういった活動を円滑に行うためにも、様々なレベルでフォーマルな金融機関の不完備を補う戦略が採られているのである。

フォーマル金融機関からの信用制約を受けている世帯に対して信用を供与してきたという点で、不完全ではありながらも代替的な役割を果たしてきたともいえるインフォーマル金融の存在意義を改めて考えておくことは、今後信用市場研究の実証レベルで見落してはならないことを確認する作業となろう。

最後に、これまでのフォーマル・インフォーマル金融からの教訓、及び補論1で紹介されている情報の経済学からの示唆を生かすことで、信用取引における逆選択やモラル・ハザード等の問題をうまく回避するような形で制度設計がなされ、一応の成功を収めつつあるといえる、新しい形の信用供与プログラムの取り組みを概観する。

3.1. 従来型フォーマル金融

フォーマルなクレジット供与策への関心の高まりは、農業セクターにおける「緑の革命」と期を一にする。食糧の増産を通じた途上国経済発展戦略において、高収量をもたらす種子そのもの導入のみならず、灌漑・肥料・殺虫剤・トラクター等の資本投入を必要とするインプットを取り入れたパッケージとしての農業生産が提案されたとき、それらをファイナンスするためのクレジット供与策の重要性が提起された。

当時、途上国で農業に従事する多くの家計が直面していたのは、「伝統的」金貸し業者による高利子であった。この高利子が各家計にとって最大の障壁であるとみなした途上国政府は、補助金付きの低利融資プログラムを導入することで、各家計の信用へのアクセスを可能にし、同時にこれら「搾取的」金貸し業者を排除しようとした。政府自らがそのようなプログラムを実施する開発銀行を設立したり、もしくは既存の商業銀行を通じて資金がターゲットとなる部門に振り向けられることを条件に低利融資を行ったりした。

しかしながら、結果は全く期待外れのものとなった。こういった金融機関は、取引額が小口で、担保となるような資産を十分に所有していない層を相手に、取引をするというノウハウを有していなかった。また一方で、借手に対しての適切なスクリーニングを行わなか

ったので、既に商業銀行等へのアクセスがあった比較的裕福な層が、低利の資金を得ようと参加してきても、それを排除することができなかった。金融機関としても、多大なコストをかけて小規模農家への融資メカニズムを構築するよりは、大口の顧客との取引の方が収益が期待されると考え、結果として顧客構成は所期の目的とは全く異なったものになってしまった。

その上、外部から資金が注入されたために、供与された融資は「融資」としてではなく、「無償の補助金」として捉えられ、また、サステイナブルな金融システムを構築していこうという理念が貸手・借手双方に欠如していたため、融資回収率は無残な結果となり、小農の経済状態には何ら目覚しい改善はみられなかった。

都市「インフォーマル・セクター」が途上国経済に果たす役割、及びこのセクターの信用制約緩和の重要性についての認識に伴う政策論議に呼応して、Adams and Von Pischke [1992]¹⁹は、農村低利融資政策の失敗の教訓が零細企業へのクレジット供与のプログラムにおいて十分生かされておらず、過去の議論と同じ論理展開が繰り返されていることに強い懸念を示している。

ところで、政府による補助金つき低利融資プログラムの背景の一つに、農村在来金融の課す高利子率という問題があった。この高利子率が、在地の貸金業者による独占力の行使によるものであると考えられたため、低利での政府による介入は正当化された。

しかしその後、その高利子率は独占によるものではなく、小農向けの貸付に伴う高コスト・機会費用・リスクを考慮に入れたうえでの、貸金業者の合理的意思決定の結果であるとする見解が出された²⁰。この見方によれば、政府による介入は市場メカニズムを歪めるとして棄却される。政府によるプログラムの失敗が明らかになる中で、この考え方は支持を集めていった²¹。

しかしながら、実際の利子率が貸付コスト・機会費用・リスク・独占力等の構成要素から、どのようにはじき出されているかを測定するのは非常に困難で、最終的な決着を見ないままやがて補論 1 で紹介している情報の経済学的发展をみる。そこでは上記 2 つのアプローチのどちらからも説明できなかった、途上国信用市場の特徴が理論的に明らかにされるに至っている。

3.2. インフォーマル金融

途上国において、フォーマルなクレジットへのアクセスがない、つまり信用制約の状態に

¹⁹ 彼らは農村向け低利融資プログラムを痛烈に批判した「オハイオ州立大学グループ」と呼ばれるグループの代表的論者である。

²⁰ Bottomley [1975]参照。

²¹ この論争に関しては岡本他[1999]、Bell [1988]などを参照。

ある家計の存在、それを緩和すべく導入された政府の低利融資政策下においては信用割当の存在、これら 2 点があたかも普遍的な事実であるかのように想定されることが多い。しかしながら、そもそもこれらの想定は果たして正しいのであろうか。

例えば後者について **Kochar [1997]**は、信用割当は一般に言われているほどの深刻さでは生じていないとしている。その理由として、①生産プロセスにおける信用市場そのものの役割が過大に評価されていること、②インフォーマル金融の利用可能性とその役割が非常に広範であるということ、の 2 点を挙げている。

他方、**Bell, Srinivasan, and Udry [1997]**はフォーマル金融における広範な信用割当の存在を指摘し、そこからあふれた層のインフォーマル金融への流入、そのインフォーマル金融でのインターリンク取引の存在に言及している²²。

信用市場そのものの重要性は改めて問われねばならない問題であるが、今ここで考えたいのは、インフォーマル金融の存在意義とそれが果たす役割である。**Rosenzweig and Wolpin [1993]**によれば、シミュレーションの結果、信用市場・保険市場が不完全な状態においても、既にインフォーマルな消費平準化メカニズムが存在しているならば、フォーマルな信用・保険市場を整備することよりも他に、農家の生産の効率性上昇を達成するための望ましい手段があり、そういった方向性での政府の役割が求められるとしている²³。

インフォーマル金融は、「高利」「搾取」という言葉でもって、排除されるべきものとして扱われる傾向があるが、その認識は果たして正しいのであろうか。様々な形態のインフォーマルな信用取引が根強く引き続き存在しているという事実の背後には、インフォーマル金融が持つ独自の合理性があるとするべきなのではなかろうか。インフォーマル金融のメカニズムを精査することなく、経済発展への障壁として退場を迫るような姿勢は、低所得層の真のニーズに対する誤った認識の結果でもあろう²⁴。

都市においてもインフォーマル金融の存在が数多く報告されている。それらは主として低所得層が自己防衛策として編み出したメカニズムであり、それらにアプローチすることは彼らの真のニーズを把握する上で不可欠といえよう。

以下の議論では、**Ghate [1992:ch2]**に従って、インフォーマル金融を 4 分類して考察することとする。すなわち①家族・親類等による資金の融通②専門マネーレンダー③インターリンク④貯蓄・貸付グループである（図 2 参照）。

²² 彼らは、クレジット需要が利子率に非弾力的であることも指摘している。

²³ 市場が不完全ながらも、オルタナティブなメカニズムが十分な保険と信用を供与しているならば、公的に供給される金融サービスや社会保障の影響は限定的であり、むしろ自生的な取り組みの成果をクラウディング・アウトしてしまう(**Cox and Jimenez [1992]**)。

²⁴ **Norvell and Wehrly [1969]**、**Kurtz [1973]**、**Kennedy [1977]**らは自生的金融制度の存在意義を積極的に認め、開発戦略において排除すべきではなく、活用すべきものであると主張している。

3.2.1. 家族・親類・地縁等

信用制約下にあるかないかにかかわらず、資金需要が生じたときにまず頼るのが家族・親類等であろう(表 1 参照)。これには期限・利子を設定する貸付けと、それらを設定しない貸付けとに分けられるが、金融取引の側面を反映しているものが前者、社会的相互扶助の側面を反映しているものが後者といえよう。

いざという時に家族・親類等が家計の経済状況の救済に第一義的役割を果たすということは、他の資金源へのアクセスが限られているような低所得層においては、意識的・戦略的に家計のメンバーを経済的ショックがもたらす影響の相関が低い活動に分配するということを示唆する。また、婚姻を通じて姻戚関係が構築されることを考慮すれば、配偶者をそういった相関の低い地域の出身者から選ぶことが合理的行動かもしれない(Rosenzweig and Stark [1989])。Paulson [1994]はタイの人口移動の分析から、出身県にいる家族に送金する目的で移動する際、バンコクと出身県との間の所得パターンの相関が低いときに、その労働者はバンコクを目指す傾向が強いということを発見している。

メキシコのように、都市化の進展・拡大家族の変容・米国への出稼ぎが顕著な社会において、こういった家計内・親族内での所得多様化・リスク分散化戦略がどのように生じているかを分析することは非常に困難であるが、今後こういった経済学的観点を踏まえた研究が必要であろう。

また、メキシコを含めたキリスト教文化が浸透している社会では、子供の洗礼時に代父母をたてることで、その間に擬制的親子関係を構築することがある(compadrazgo)。代父母はその後精神的・物質的に代子にコミットすることが期待されるわけだが、そこでの機能もまた、本稿の分析の視野に入りうることは想像に難くない²⁵。

しかしながら、Rutherford [2002]が指摘しているように、血縁・地縁等を頼りにする場合、借手が必要とする時に必要とする額を、貸手の側が常にそれに応じられる状態にあるとは保証できない。それゆえ、フォーマルな金融サービスの代替物とはなり得ず、非常に脆弱でその役割も限定的であるといえる。

3.2.2. 専門的マネーレンダー・インターリンクエージ

専門的マネーレンダーとは貸金業のみを営む者であり、借入金の使途に関しては一般的に制約がない。一方インターリンクエージは複数の取引の組み合わせからなっており、本稿の文脈でいえば、信用取引が投入財の供給や生産物の引渡し取引と一体化しているものを指す²⁶。そこでの借入金は基本的にリンクした活動・取引に振り向けられる。

²⁵ compadrazgo に関しては Foster [1953]参照。Lewis [1961]の人類学的研究からは、それが日常生活で果たす機能が部分的に窺える。

²⁶ 前の部分で、インフォーマル金融を「低所得層が自己防衛策として編み出したメカニズム」と述べたが、専門的マネーレンダーは性質が異なる。しかしながら、分類の便宜上ここに含めて簡潔に述べることにした。インターリンクエージに関して詳しくは、Bell [1988]、

現実の途上国信用市場を見ると、貸金業のみを行っている者はそれほど多くなく、むしろ地主や商人がクレジットを同時に提供しているというのが一般的である。よってここでは主としてインターリンクージュのみについて言及する。

かつてインターリンクージュ取引はその一面だけを捉えて「非市場的」「搾取的」などと評価された。しかしながら、このシステムは潜在的取引相手に関しての情報収集に多大なコストがかかる社会においては、既知の取引相手と長期安定的関係を維持するうえで非常に合理的であるということが分かってきている。貸手・借手双方にとって、信頼できる取引相手を探すためにはコストがかかる。一度コストをかけて築いた関係というのは、その当事者間のみ(relation-specific)の「資産」であるといえよう。そこでは複数の取引における各種パラメータを微妙に調整しながら、互いの利得のバランスを図っているのである。

再び表 1 に示されたメキシコの例を見ると、投入財の供給者からのクレジットがもっとも大きな比重を占めていることが分かる。今後フィールド調査を行うならば、インターリンクージュの実態が少しでも明らかとなるような質問事項が準備されるべきであろう。

3.2.3. 貯蓄・貸付グループ

これまで見てきたインフォーマル金融のように資金を外部に求めるのではなく、グループ内部で資金の需要と供給を満たそうというシステムがインフォーマル金融の一角を占める。数人のグループから、大きいものでコミュニティー単位でのグループと、その規模は様々であるが、基本は成員の拠出金をプールし、そこからローンを行うという単純なものである。

まずここで重要なのは、Rutherford [2002]などが言及しているような、貧困層の貯蓄能力である²⁷。貧困層には貯蓄する意志も能力もないという先入観は、外部からの資金注入を前提とするフォーマル金融メカニズムの構築という議論につながっていく。外部資金依存の場合、受益者には「自らの資金がシステムの運営に貢献している」という実感が伴わず、ともすると前述のように、融資を無償の補助金と捉えられかねない。そこで貸付資金の源泉として、受益者の貯蓄を動員しているようなメカニズムへの注目度が高まったわけだが、ここでいう自生的な貯蓄・貸付グループの広範な存在が、低所得者間での貯蓄動員能力の証左を提出しているといっても過言ではなかろう。後に触れるように、貧困層の貯蓄能力に対する正しい認識は、新しい形の信用供与プログラムの誕生・発展に大きく寄与することとなる。

補論 2 に貯蓄・貸付グループの代表例である ROSCA を挙げておいた。そこでは、新たな

黒崎[2001]参照。

²⁷ 「ROSCA (Rotating Savings and Credit Association: 補論 2 参照)が広範に存在しているという事実は、フォーマル金融のサービス浸透の失敗を物語っていると同時に、低所得層の貯蓄能力等への批判的論説への反証を提出している」(Mansell-Carstens [1996])。

「ROSCA の存在こそが、低所得層の貯蓄能力・貯蓄慣習の例証である」(Katzin [1959])。

低所得層向け金融システムの構築において、この伝統的なグループ内金融メカニズムから如何に多くのインプリケーションが導き出されているかが窺い知れよう。

3.3. 新しい型の信用市場の創造へ

補論 1 で紹介されている情報の経済学の発展によって、フォーマル・インフォーマル双方の信用市場において見られた様々な現象は、情報の非対称性とその下での経済合理的な意思決定の結果として説明された。このことは従来までの信用市場における各種メカニズムの再考を促した。この動きは、一般に「伝統的」「非合理的」と考えられながらも根強く存続してきたインフォーマル金融の再評価を強く推し進め、そのシステムに内在していた「合理性」を次々に明らかにしてきた。それに呼応して、途上国政府・開発援助機関・NGO等の様々なアクターが、そのようにして再評価されたメカニズムを各種プログラムに積極的にフィードバックしているのである。

ここで「新しい」という言葉は、その金融形態が登場した時期を指して用いられているのではなく、情報の経済学からの貢献が意識的に反映させられた信用供与プログラムに対して用いられている。

協同組合・信用組合方式はそういったフィードバックが積極的になされている金融制度の一つである²⁸。FINCA などの NGO がラテンアメリカ等で推進している「村銀行」(village bank)は、村落共同体を基盤とした 30~50 名のメンバーからなる貯蓄・貸付グループであり²⁹、グラミン銀行の「成功」等に触発された新たな試みである。

筆者は「新しい」型の信用市場の潮流の起点としてグラミン銀行を据え、以後のグラミン型マイクロファイナンスは一貫してこの流れの本流に位置づけられると考えている。この型の信用市場は、最も基本的な単位として地縁・血縁・コミュニティーを置き、従来型インフォーマル金融に近い形でのプログラムから出発するが、適切な制度設計により水平的・垂直的にそれらを結びつけ、地域・国レベル、もしくはそれ以上のネットワークをも作り出す可能性を示している。このことは「フォーマル」な信用市場の整備を課題としてきた政府の利害と対立するものではなく、むしろ補完的であり、それらのメカニズムが効率的に運営されている以上、政府は資金提供という形で積極的に支援することも可能である。グラミン型マイクロファイナンスは以上のように草の根でありながら、政府に依存するわけ

²⁸ Huppi and Feder [1990]は、協同組合、グループ貸付のそれぞれにおいて、高返済率を維持するためにはどのようなメンバー構成が望ましいかを論じている。

²⁹ “Village banks are community-managed credit and savings associations.”という Holt [1994]の定義は非常に簡潔で分かりやすい。また、岡本他[1999]によれば、「インドの貯蓄・貸付グループの場合、融資前の一定期間の預金が要求され基本的に預金から融資を行うのに対し、村銀行では設立後すぐに外部資金を利用して貸付けが行われるという違いがある。」

でもなければ、政府を排除するでもない、新しい関係の可能性を開いたといえよう。

「新しい」型の可能性はまた、研究者の関心をひきつけることにも成功した。それを通じてとりわけ伝統的メカニズムの合理性に我々は気付かされたわけだが、そこで示唆されていることは何ら政府の採用すべき経済・社会開発戦略に抵触するものではないのである。

第 3.2 節までの議論は、「フォーマリティー」が分類上主たる視点であった。しかしながら、信用制約を通じての貧困緩和戦略において、最も重要なことは「フォーマリティー」ではなく、各家計・階層のニーズに柔軟に応えうる金融サービスの制度設計であることは既にコンセンサスのあるところであろう。フォーマル・インフォーマル金融それぞれの成功例・失敗例からの教訓・反省を生かした、いわば両者の対立構造を超えた「ハイブリッド」型の金融メカニズムの創造こそが、開発の現場で求められていることである。

おわりに

本稿では、ラテンアメリカ都市零細自営業部門を念頭に、信用市場の機能、信用制約の及ぼす影響、信用制約緩和を目指したフォーマル・インフォーマル両面での取り組み等をレビューした。参照した文献は主に農村を分析の対象としたものであったが、都市へと視点をシフトしていくための十分な示唆が得られた。

理論面・実証面に関しては、今後先行研究の中から応用度の高そうなものを集中的に取捨選択して、都市零細自営業家計の実態により近いモデルの構築をしていかなければならないであろう。

クレジット供与という実践面においては、自生的金融制度の存在にまで細心の注意を払い、それらと競合するメカニズムを提供するのではなく、補完しあうメカニズムを構築することが何よりも重要なこと、また、社会的紐帯が農村に比して希薄な都市において、情報の非対称性・履行強制の問題を回避していくには、なお一層そういった自生的な制度からのアイデアを取り入れた、「ハイブリッド」型のメカニズムが有効に機能するであろうこと、が明らかになったであろう。

補論 1. グラミン銀行と情報の経済学

農村在来金融の高利子率をめぐる議論は、それ以外の特異な現象、すなわちフォーマルな貸手とインフォーマルな貸手の共存、信用割当、インターリンクージなどを説明することができなかった。また一方で、グラミン銀行³⁰の「成功」は、それまでの常識とは異なった融資方法に内在するメカニズムの、経済学的な解釈を課題として提出した。

前者に課題に関しては、情報の不完全性と履行強制の不完全性を強調した、**imperfect information paradigm** からの回答がなされた(**Hoff and Stiglitz [1990]**)。利子率は価格として機能するだけでなく、間接的スクリーニング・メカニズムとしても機能し、貸手のポートフォリオのリスク構成を規定する。よって、リスクの高い借手を排除するため、超過需要があっても利子率は据え置かれ、このために信用割当が生じるとした(**Stiglitz and Weiss [1981]**)。

また、借手が貸手にとって好ましい行動をとるように、貸手はデフォルトが生じた場合には、将来のクレジットの供与を遮断するという脅しを借手に対して用いようとする(モラル・ハザードの回避及び履行強制)(**Stiglitz and Weiss [1983]**)。この脅しが有効であるためには、借手がクレジットを受けることから何らかの余剰を得ていなければならない。この余剰は利子率を通じて調整されると考えられる。そのため同様に信用割当が生じることとなる。

信用割当によってフォーマル金融へのアクセスからあふれてしまった家計はインフォーマル金融(在地の貸金業者)に頼らざるを得ない。この貸金業者は、自らの所へやってくる家計はフォーマル金融の間接的スクリーニング・メカニズムで、リスクの高い家計としてはじかれた可能性が高いということが分かっているので、そのリスクを考慮に入れて非常に高い利子率で貸付を行おうとする。こうして低利のフォーマルと高利のインフォーマルの共存が説明される訳である。

グラミン銀行に関しては、とりわけ貸付を受けるグループの役割が注目された。グループに連帯責任を負わせることで、リスクの高い借手を予め排除するとともに(**peer selection**)、リスクの高い活動が選択できないようになっている(**peer monitoring**)のである。このことは同時に貸手の負担を一部グループに転嫁する形となっており、銀行の持続可能性を高める一要因にもなっているのである。さらに、銀行の持続可能性は、デフォルトの際のクレジット遮断に対する脅しの有効性を高める働きをする。

なお **Stiglitz [1990]**はグループ連帯責任性のメカニズムの分析を、**Besley and Coate [1995]**は、連帯責任関係にあるもの同士の共謀による戦略的デフォルトのモデル化を行っている。

³⁰ グラミン銀行の設立経緯や理念については **Yunus [1997]**を、発展経緯については **Khandker, Khalily, and Khan [1995]**などを参照。

補論 2. ROSCA (Rotating Savings and Credit Associations)

ここでは、非常に古くからあるインフォーマルな金融形態であり、かつ情報の経済学・契約理論・オークションセオリーからの分析が近年大変活発に行われているとともに、開発現場への積極的活用が提起されるまでに至っている ROSCA を取り上げる³¹。

ROSCA に関する研究は 1940 年代から 60 年代にかけて、人類学の分野で多くの報告がなされているが、経済学の分野において ROSCA はあまり取り上げられることはなかった。先駆的研究としては、Geertz [1962]や Ardener [1964]が挙げられる。

Geertz は、ROSCA を“middle rung”と位置づけ、農業経済と商業経済をつなぐ掛け橋、お金に対する農民的態度(peasant attitudes)と商人的態度(trader attitudes)をつなぐ掛け橋ととらえた。つまり、ROSCA は伝統的農村社会から近代的商業社会へのシフトの過程で、農業従事者が市場的取引を行っていくためのトレーニングを行うシステムとして活用されているとした。Ardener や Kurtz [1973]はこの Geertz の見方に批判的である。特に Kurtz [1973]はメキシコ都市部の ROSCA の研究において、それは市場経済の様々なシステムへのアクセスを「剥奪」された層が、貧困への対応策として活用しているものであって、市場経済に「順応」していくために活用しているものではないと結論づけている³²。

80 年代後半あたりから経済学の文献にも ROSCA についての記述的報告が見られるようになり、現在ではそのメカニズムが数学的に表現されるまでに至っている³³。近年注目を集めているオークションセオリーを用いての分析もいくつか発表されているが、ここでは ROSCA の機能を記述的に考察するに留め、複雑な数理的分析の紹介は行わない。

人類学における初期の研究では、ROSCA はアジア・アフリカで多く観察されるが、ラテンアメリカにおいてその普及は限定的であるとされた。また、これら初期研究ではグループ内貸付の側面が強調されており、貯蓄システムとしての機能はそれほど重要視されていなかったと思われる。なぜなら、ROSCA という用語は 1980 年ごろに登場しており、それ以前は Rotating Credit Associations という用語を採用している文献が非常に多いからである。しかしながら、その後の研究成果から、ROSCA の存在は限定された地域に留まらず、広く世界中にみられる現象であって、その形態も地域の実情にあわせて柔軟に変化しつつ

³¹ ここでは ROSCA という用語で統一してしまっているが、厳密には、メンバーからの拠出金のプールが、毎回何らかの方法によって決められた順番に従いある一人のメンバーに手渡されるケースを ROSCA (Rotating Savings and Credit Associations)、拠出されたお金がある特定のメンバーに渡されることなく、資金の蓄積を主目的とし、必要があればそのプールからローンを得られるようなシステムを採っているものを ASCRA (Accumulating Savings and Credit Associations)と呼ぶ(Bouman [1994,1995])。ROSCA と ASCRA の主な特徴等の比較は、Bouman [1995: Table 1]参照。本稿の表 2 においては ROSCA と ASCRA の分類が行われている。

³² Putnam [1993]は、social capital の観点から ROSCA にアプローチしている。

³³ Low [1995]は ROSCA の包括的なサーベイをおこなっている。また、ROSCA の理論的枠組みに関しては Besley, Coate, and Louny [1992,1993]を参照。

浸透していることが明らかとなった(表 2 参照)。また、第 3 節で述べた低利融資政策の失敗・反省の過程で、自生的金融制度の存在と、その運営を可能にしている参加者からの貯蓄・拠出金の重要性に注目が集まった。ROSCA を含めた在来システムがもつ貯蓄機能としての有効性の再認識、及び経済学の分野での ROSCA の研究の発展は偶然の一致ではないように筆者には思われる。

具体例として、筆者が 2003 年にメキシコシティの N 地区で観察した事例を報告しておく。メキシコにおいては ROSCA を組織するのは主として女性であり、筆者がインタビューした ROSCA のオーガナイザー 2 名、ASCRA のオーガナイザー 1 名も全て女性であった³⁴。

一人目の女性はチョコ菓子の製造販売のための運転資金を調達する手段として ROSCA を組織していた。メンバーは彼女を含め 11 人で、会合は毎週開き、拠出金のプールを持ち帰る順番はくじ引きによって決めていた。メンバーには自営業を営んでいないものが多く、また彼女自身が資金を必要としていたという理由から、資金の回収・記録・分配の責任を引き受ける代わりに、第一回目のプール金をコミッションとして受け取ることに同意を全メンバーから取り付けていたとのことであった。原則として資金の用途はお互い問わないことにしているが、彼女によれば恐らく他メンバーは ROSCA の資金を学用品や家賃の支払に充てているだろうとのことであった。

二人目の女性も ROSCA を組織していたが、彼女はセミプロのオーガナイザーであった。過去に職場の仲間同士での ROSCA を組織していたが、その評判が良く、参加者が段階的に増えていき、仕事を辞めた今でも 48 人のメンバーを 4 つのグループに分けて ROSCA を運営していた。前述の女性の例では現在のサイクルが終了した際、新たに同メンバーで ROSCA を再開するかどうかは未知であったが、この女性が組織する 4 つの ROSCA は恒常的なものとなっていた。ROSCA 運営の対価として手数料は受け取っておらず、他にも金銭的な利得を得ているという証左はないが、グループをまとめてそのリーダーとなることにより、社会的地位といった非金銭的な利得を得ていると考えられる。

三人目の女性は 1 年単位での ASCRA を運営していた。毎週のメンバーからの積立金をプールし、メンバーの資金需要に応じて利子付きでそこから貸付を行っていた。彼女は利子計算や記帳などの煩雑な作業を引き受ける代わりに、プール金を無利子で利用できるとのことであった。メンバーの合意の下、非メンバーにも貸付を行っており、メンバーに対してよりも高い利率が設定されていた。積立金のプールと利子収入の合計は開始から 1 年後にメンバー間に配分されて、1 サイクルが終了となる。

以上、メキシコシティでの事例を報告したが、それでは ROSCA のメリットはどのようなものであろうか。Arias [1997]では、ROSCA が零細自営業者にとって、運転資金を調達するための非常に重要な源泉であるとしている(第 2.1 節)。第 3.2.2 節で広範なインターリンクエージの存在の可能性を指摘したが、全ての家計がそのように原材料とクレジットを組

³⁴ メキシコシティにおいては ROSCA は tanda、ASCRA は caja de ahorros と呼ばれる(表 2 参照)。

み合わせた取引ができるわけではない。とりわけ同業者同士による ROSCA の場合、毎回のまとまった資金で原材料等を格安で調達することもできよう。

また、第 2.2 節で自宅で現金を保管することの危険性を述べたが、ROSCA の利点は貯蓄メカニズム代わりとして活用できるという点にも見出されよう。Besley [1995]は、ROSCA のサイクル中に健康面や所得面でショックを受けた場合、ROSCA はリスク・シェアリング機能を果たすと述べている。ROSCA への拠出金が外部に流出することなく、グループ内部で循環することの意義を強調する文献も少なくない。

Callier [1990]は ROSCA の目的を耐久消費財の購入であるとし、そのときのメリットは「耐久消費財購入までの平均待ち時間の減少」であるとしている。また、同じ額を個人で貯蓄しようとするとき、様々な消費圧力・誘惑により予定通りに目的額を達成するのは難しいが、目的が明確ならば「半強制貯蓄」ともいえる ROSCA の活用は理に適った戦略であるといえよう。

さて、当然のことながら ROSCA には弱点もある。弱点ゆえに ROSCA そのものを否定するのではなく、その部分を補完できる金融システムを如何に構築できるかを考えることが肝要である。Tchuindjo [1999]によれば、通常 ROSCA の 1 サイクルは 1 年未満のため、これを通じて長期的な戦略から投資を行うのには限界があるとしている。

また、ROSCA の弱点の多くは資金へのアクセスがローテーションすることに起因する³⁵。ローテーションを各メンバーの支出プランと一致させることは非常に難しいため、いつ資金を得られるのか、自らの資金需要に呼応して資金を得られるのか、が確実ではない。さらに、每期資金を獲得するのは一人のメンバーのみなので、同時に数人のメンバーが資金を必要とするようなとき(農業生産、税金の支払、授業料の支払等)には ROSCA は適さないといわれている。一サイクルで一度しか資金を得られないので、同一の ROSCA に数口参加したり、同時に複数の ROSCA に参加したりすることも一般にみられる。

ところで、ROSCA からの資金が生産目的ではなく消費目的に使われてしまうのではないかと、という批判もある。しかしながら Kirton [1996]の指摘する通り、この点は注意深い分析が必要である。なぜなら多くの零細自営業家計において、一見、消費目的の購入と思われる資産が、生産活動にも用いられるケースが存在するからである(資産の両義性)。例えば、冷蔵庫の購入は必ずしも家計内消費のみに限定されず、貯蔵を必要とするような食料品を販売する経済活動のために用いられるかもしれない。自宅が零細自営業活動の生産の場で

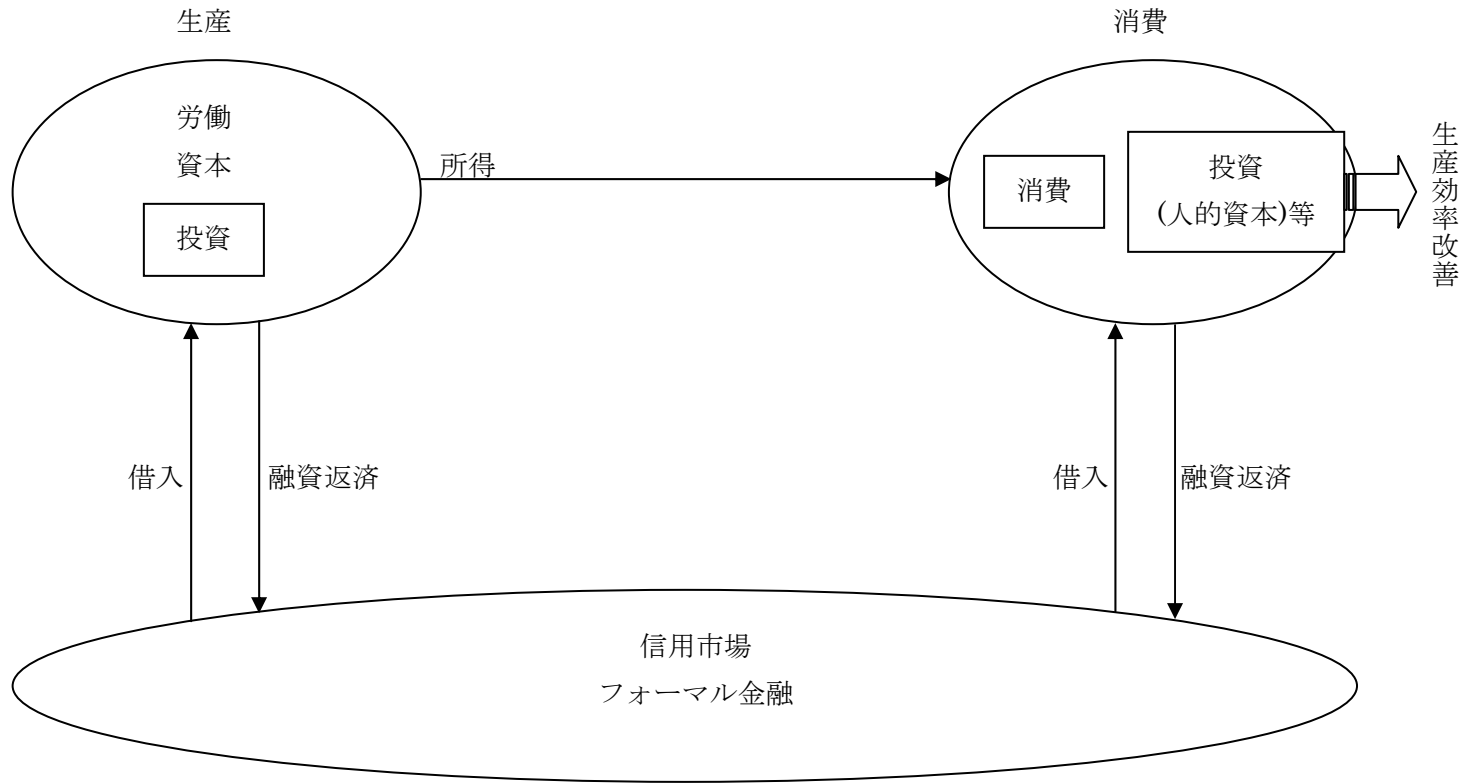
³⁵ 一般にローテーションの決定方式としては、くじ引き等による場合(random ROSCA)と入札方式による場合(bidding ROSCA)とがある(Besley, Coate, and Loury [1993])。信用市場が整備される過程では、たいてい貯蓄制度の整備のほうがクレジット供与の制度構築に先行する。このとき、信用供与という役割から ROSCA の意義は保たれるが、一方で既に外部に貯蓄制度が存在する以上、ROSCA に参加する機会費用は高くつくかもしれない。ここに bidding ROSCA が登場する論理があるといえよう(Callier [1990])。Kennedy [1977]によれば、各期に自らの資金状況を踏まえて入札額を決められる bidding ROSCA は、企業家の間で好ましい方式として捉えられているという。

もあるケースが多いことを考えると、住居の改善に **ROSCA** からの資金を投入することは、生産面での効率性を改善する役割も果たしうる。また、住居の改善に伴い健康・衛生状態も改善し、そのルートからの生産効率改善も考えられよう。

最後にラテンアメリカとの関連でいえば、この地域は過去強烈なインフレを経験した時期に、**ROSCA** は比較的短期・小規模となることでそれに対処してきた。インフレ率の推移が安定を取り戻して以降、再びこういった類の変化が生じたのかどうか等を含め、**ROSCA** の制度面に関する研究も興味深い作業である。

図 1-1

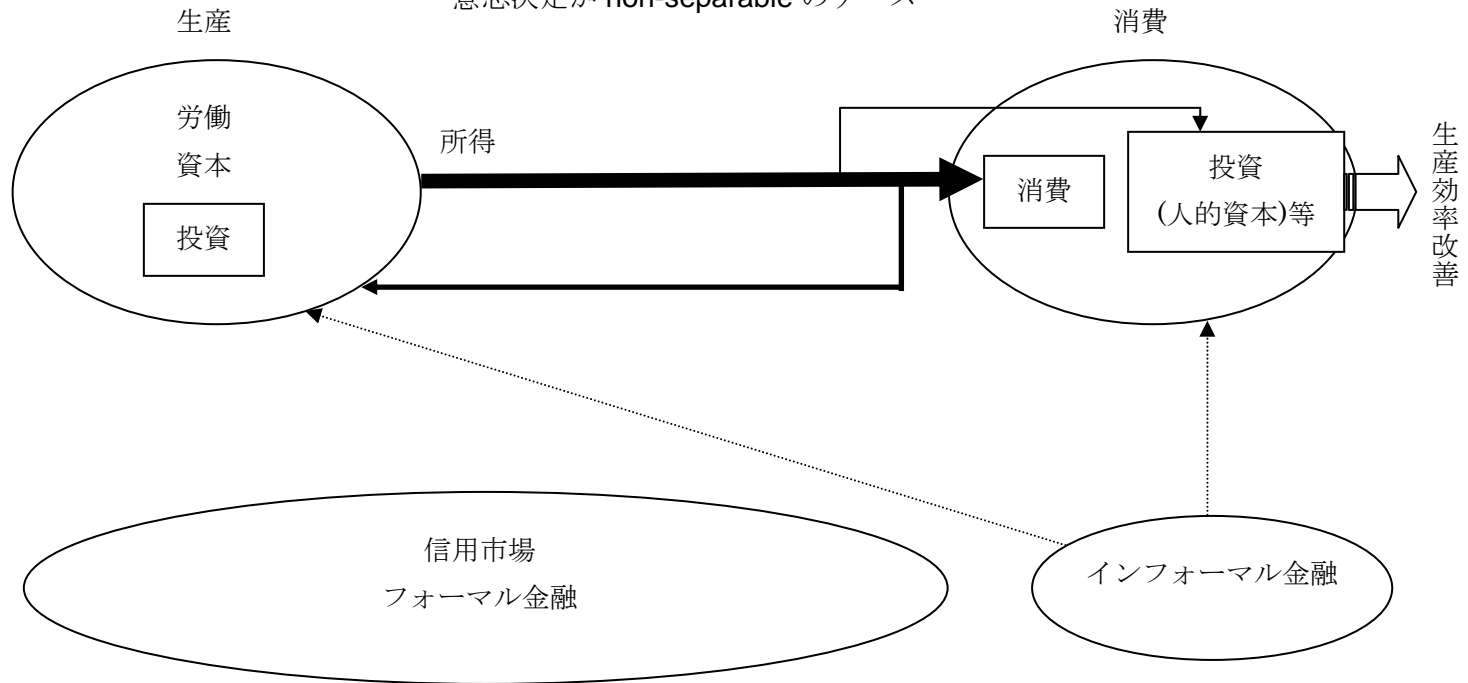
消費・生産の意思決定が separable のケース



出所) 筆者作成

図 1-2

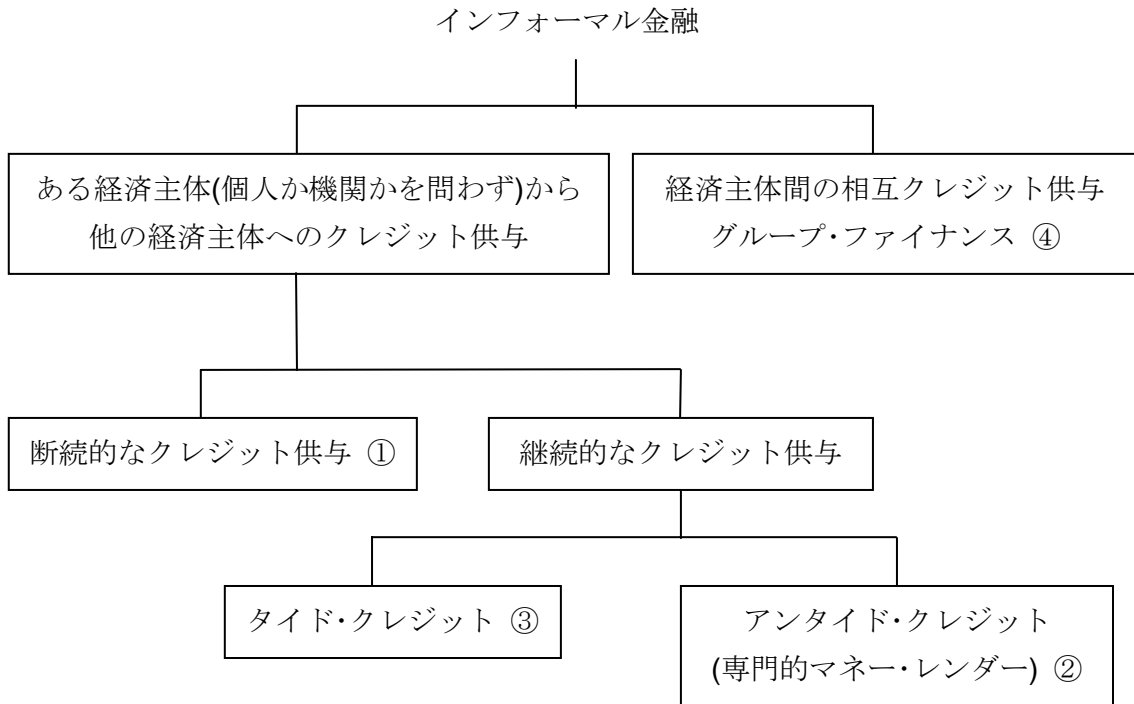
信用市場へのアクセスがないため、消費・生産の
意思決定が non-separable のケース



注1) 実線の太さは家計にとっての優先順位を表している。フォーマル金融に比べインフォーマル金融が果たす役割というのは限定的・部分的である、ということを示している。

出所) 筆者作成

図 2 インフォーマル金融の分類



Ghate (ed.) [1992] p.24, Figure1

表 1: 零細企業立ち上げのために受け取ったローンの分類

	未登録企業	%	登録企業	%
銀行ローン	9930	6	69638	23
貯蓄金庫ローン	9853	6	10215	3
友人・親戚からのローン	56722	34	67523	22
貸金業者からのローン	8935	5	14271	5
サプライヤーズ・クレジット	69477	42	132868	44
その他	11339	7	10069	3
ローンを受けた 零細企業総数	166256	100	304584	100
ローンを受けなかった 零細企業総数	2102875		1002643	
零細企業総数	2269131		1306456	

出所) INEGI. [1997] *Encuesta Nacional de Micronegocios*, 1996.

Aguascalientes: México.

表 2 ROSCA・ASCRA に関する記述・先行研究(ラテンアメリカ)

	国名	呼称	ROSCA/ASCRA ^{1) 2)}
ラテンアメリカ			
Lewis (1961)	Mexico	Caja de ahorros	ASCRA
Kurtz (1973)	Mexico	Cundina	ROSCA
Kurtz & Showman (1978)	Mexico	Tanda	random ROSCA
Cope & Kurtz (1980)	Mexico	Tanda	random ROSCA
Vélez-Ibáñez (1982)	Mexico	Tanda, Cundina	ROSCA
Mansell-Carstens (1996)	Mexico	Tanda, etc.	ROSCA, ASCRA
Arias (1997)	Mexico	Tanda	ROSCA
Nash (1964)	Guatemala		random ROSCA
Norvell & Wehrly (1969)	Dominican Rep.	San	random ROSCA
<i>Time</i> (1967)	Brazil	Consorcio	random, bidding ROSCA
Katzin (1959)	Jamaica	Partner	ROSCA
Kirton (1996)	Jamaica	Partner	ROSCA
Herskovits & Herskovits (1947)	Trinidad	Susu	ROSCA
Fischer (1988)	Peru	Pandero	random ROSCA
Adams & Canavesi (1989)	Bolivia	Pasanakus	random ROSCA

注 1) ROSCA は文献から明示的に判別できるもののみ、ローテーションの決め方に準じて random と bidding に分類した(Besley, Coate, and Louny [1993])。その他の形態によるもの(オーガナイザーによるローテーションの決定やコンセンサス方式など)は記入しなかったが、非常に多くの文献において、そういった決定方式も報告されている。

2) ROSCA と ASCRA の定義に関しては Bouman [1994,1995]参照。

出所) 筆者作成

参考文献

- 岡本真理子・粟野晴子・吉田秀美編著[1999]『マイクロファイナンス読本－途上国の貧困緩和と小規模金融－』明石書店
- 黒崎卓[2001]『開発のミクロ経済学－理論と応用－』岩波書店
- 黒崎卓・山形辰史[2003]『開発経済学－貧困削減へのアプローチ－』日本評論社
- 澤田康幸[2003]「通貨危機の社会的インパクト-展望と韓国家計データによる例示-」高木信二編『通貨危機と資本逃避－アジア通貨危機の再検討－』東洋経済新報社
- Adams, Dale W. and J. D. Von Pischke [1992], "Microenterprise Credit Programs: Déjà Vu," *World Development*, Vol.20, No.10, pp.1463-1470.
- Adams, Dale W. and Marie L. Canavesi de Sahonero [1989], "Rotating Savings and Credit Associations in Bolivia," *Savings and Development*, Vol.13, No.3, pp.219-236.
- Ardener, Shirley [1964], "The Comparative Study of Rotating Credit Associations," *Journal of the Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland*, Vol.84, pp.201-229.
- Arias, Patricia [1997], "La "Tanda" en Tiempos de la Globalización," *Ciudades*, Núm.35, pp.41-46.
- Banerjee, A. V. and A. F. Newman [1993], "Occupational Choice and the Process of Development," *Journal of Political Economy*, Vol.101, No.2, pp.274-298.
- Bardhan, P. and C. Udry [1999], *Development Microeconomics*, Oxford University Press.
- Bell, C. [1988], "Credit Markets and Interlinked Transactions," in H. Chenery and T. N. Srinivasan (eds.), *Handbook of Development Economics*, Vol.I, Amsterdam: Elsevier Science Publishers, pp.763-830.
- Bell, Clive, T. N. Srinivasan, and Christopher Udry [1997], "Rationing, Spillover, and Interlinking in Credit Markets: The Case of Rural Punjab," *Oxford Economic Papers*, Vol.49, No.4, pp.557-585.
- Besley, Timothy [1995], "Nonmarket Institutions for Credit and Risk Sharing in Low-Income Countries," *Journal of Economic Perspectives*, Vol.9, No.3, pp.115-127.
- Besley, Timothy and Stephen Coate [1995], "Group Lending, Repayment Incentives and Social Collateral," *Journal of Development Economics*, Vol.46, No.1, pp.1-18.
- Besley, Timothy, Stephen Coate, and Glenn Loury [1992], "On the Allocative Performance of Rotating Savings and Credit Associations," Discussion Paper No.163, Research Program in Development Studies, Princeton University.
- Besley, Timothy, Stephen Coate, and Glenn Loury [1993], "The Economics of Rotating Savings and Credit Associations," *American Economic Review*, Vol.83, No.4 pp.792-810.

- Binswanger, H. and M. R. Rosenzweig [1986], "Behavioral and Material Determinants of Production Relations in Agriculture," *Journal of Development Studies*, Vol.22, pp.503-539.
- Bottomley, A. [1975], "Interest Rate Determination in Underdeveloped Rural Areas," *American Journal of Agricultural Economics*, Vol.57, No.2, pp.279-291.
- Bouman F. J. A. [1994], "ROSCA and ASCRA: Beyond the Financial Landscape," in F. J. A. Bouman and Otto Hospes (eds.), *Financial Landscapes Reconstructed: The Fine Art of Mapping Development*, Boulder: Westview Press.
- Bouman F. J. A. [1995], "Rotating and Accumulating Savings and Credit Associations: A Development Perspective," *World Development*, Vol.23, No.3, pp.371-384.
- Brooke, James [1987], "Cameroon's Tontines Outdo Banks: 'Tribal' Way Cuts Red Tape, but Default Means Disgrace," *International Herald Tribune*, December 4.
- Callier, Philippe [1990], "Informal Finance: The Rotating Saving and Credit Association – An Interpretation," *Kyklos*, Vol.43, Fasc.2, pp.273-276.
- Campbell, Colin D. and Chang Shick Ahn [1962], "Kyes and Mujins: Financial Intermediaries in South Korea," *Economic Development and Cultural Change*, Vol.11, No.1, pp.55-68.
- Cope, Thomas and Donald V. Kurtz [1980], "Default and the Tanda: A Model Regarding Recruitment for Rotating Credit Associations," *Ethnology*, Vol.19, No.2, pp.213-231.
- Cox, Donald and Emmanuel Jimenez [1992] "Social Security and Private Transfers in Developing Countries: The Case of Peru." *World Bank Economic Review*, Vol.6, No.1, pp.155-69.
- Embree, John F [1939], *Suye Mura: A Japanese Village*, University of Chicago Press.
- Eswaran, Mukesh and Ashok Kotwal [1986], "Access to Capital and Agrarian Production Organization," *Economic Journal*, Vol.96, pp.482-498.
- Feder, G. [1987], "Land Ownership Security and Farm Productivity: Evidence from Thailand," *Journal of Development Studies*, Vol.24.
- Feder, G. and T. Onchan [1987], "Land Ownership Security and Farm Investment in Thailand," *American Journal of Agricultural Economics*, Vol.69.
- Fischer, Bernhard [1988], "Domestic Capital Formation, Financial Intermediation and Economic Development in Peru," *Savings and Development*, Vol.12, No.4, pp.321-342.
- Foster, G. M. [1953], "Cofradía and Compadrazgo in Spain and Spanish America," *Southwestern Journal of Anthropology*, Vol.9, No.1, pp.1-28
- Galor, O. and J. Zeira [1993], "Income Distribution and Macroeconomics," *Review of*

- Economic Studies*, Vol.60, No.1, pp.35-52.
- Gamble, Sidney D. [1944], "A Chinese Mutual Savings Society," *Far Eastern Quarterly*, Vol.4, No.1, pp.41-52.
- Garreau, Joel [1991], "For Koreans, 'Keh' Is Key to Success: Financial Pools Used to Launch Businesses," *The Washington Post*, November 3.
- Gavian, S. and M. Fafchamps [1996], "Land Tenure and Allocative Efficiency in Niger," *American Journal of Agricultural Economics*, Vol.78, No.2.
- Geertz, Clifford [1962], "The Rotating Credit Association: A "Middle Rung" in Development," *Economic Development and Cultural Change*, Vol.10, No.3, pp.241-263.
- Ghate, Prabhu (ed.) [1992], *Informal Finance: Some Findings from Asia*, Asian Development Bank.
- Herskovits, Melville J. and Frances S. Herskovits [1947], *Trinidad Village*, New York: Alfred A. Knopf.
- Hoff, Karla and Joseph E. Stiglitz [1990], "Introduction: Imperfect Information and Rural Credit Markets – Puzzles and Policy Perspectives," *The World Bank Economic Review*, Vol.4, No.3, pp.235-250.
- Holt, Sharon L. [1994], "The Village Bank Methodology: Performance and Prospects," in María Otero and Elisabeth Rhyne (eds.), *The New World of Microenterprise Finance: Building Healthy Financial Institutions for the Poor*, Connecticut: Kumarian Press.
- Huppi, Monika and Gershon Feder [1990], "Role of Groups and Credit Cooperatives in Rural Lending," *World Bank Research Observer*, Vol.5, No.2, pp.187-204.
- Jacoby, Hanan G. and Emmanuel Skoufias [1997], "Risk, Financial Markets, and Human Capital in a Developing Country," *Review of Economic Studies*, Vol.64, No.3, pp.311-335.
- Katzin, Margaret F. [1959], "Partners: An Informal Savings Institution in Jamaica," *Social and Economic Studies*, Vol.8, pp.436-440.
- Kennedy, Gerard F. [1977], "The Korean Kye: Maintaining Human Scale in a Modernizing Society," *Korean Studies*, Vol.1, pp.197-222.
- Khandker, Shahidur R., Baqui Khalily, and Zahed Khan [1995], *Grameen Bank: Performance and Sustainability*, World Bank Discussion Paper 306.
- Kimuyu, Peter Kiko [1999], "Rotating Saving and Credit Associations in Rural East Africa," *World Development*, Vol.27, No.7, pp.1299-1308.
- Kirton, Claremont [1996], "Rotating Savings and Credit Associations in Jamaica: Some Empirical Findings on Partner," *Social and Economic Studies*, Vol.45, Nos.2&3, pp.195-224.

- Kochar, Anjini [1997], "An Empirical Investigation of Rationing Constraints in Rural Credit Markets in India," *Journal of Development Economics*, Vol.53, pp.339-371.
- Kurosaki, Takashi and Marcel Fafchamps [2002], "Insurance Market Efficiency and Crop Choices in Pakistan," *Journal of Development Economics*, Vol.67, No.2, pp.419-453.
- Kurtz, Donald V. [1973], "The Rotating Credit Association: An Adaptation to Poverty," *Human Organization*, Vol.32, No.1, pp.49-58.
- Kurtz, Donald V. and Margaret Showman [1978], "The Tanda: A Rotating Credit Association in Mexico," *Ethnology*, Vol.17, pp.65-74.
- Lewis, Oscar [1961], *Antropología de la Pobreza: Cinco Familias*, México: Fondo de Cultura Económica.
- Low, Alaine [1995], *A Bibliographical Survey of Rotating Savings and Credit Associations*, Oxford: Oxfam and Centre for Cross Cultural Research on Women.
- Mansell-Carstens, Catherine [1996], "Popular Financial Culture in Mexico: The Case of the Tanda," in Laura Randall (ed.), *Changing Structure of Mexico: Political, Social, and Economic Prospects*, New York: M. E. Sharpe.
- Miracle, Marvin P. [1971], "Rotating Credit Associations in Latin America," *Caribbean Studies*, Vol.11, No.3, pp.119-120.
- Mookherjee, Dilip and Debraj Ray [2003], "Persistent Inequality," *Review of Economic Studies*, Vol.70, pp.369-393.
- Morduch, Jonathan [1995], "Income Smoothing and Consumption Smoothing," *Journal of Economic Perspectives*, Vol.9, No.3, pp.103-114.
- Nash, Manning [1964], "Capital Saving, and Credit in a Guatemalan and a Mexican Indian Peasant Society," in Raymond Firth and B. S. Yamey (eds.), *Capital, Saving and Credit in Peasant Societies: Studies from Asia, Oceania, the Caribbean and Middle America*, Chicago: Aldine Publishing Company.
- Norvell, Douglass G. and James S. Wehrly [1969], "A Rotating Credit Association in the Dominican Republic," *Caribbean Studies*, Vol.9, No.1, pp.45-52.
- Ottenberg, Simon [1968], "The Development of Credit Associations in the Changing Economy of the Afikpo Igbo," *Africa*, Vol.38, No.3, pp.237-252.
- Paulson, Anna L. [1994], *Insurance Motives for Migration: Evidence from Thailand*, Mich.: UMI Dissertation Information Service.
- Putnam, Robert D. [1993], *Making Democracy Work: Civic Traditions in Modern Italy*, Princeton University Press.
- Ray, D. [1998], *Development Economics*, Princeton: Princeton University Press.
- Rehfishch, F. [1972], "A Rotating Credit Association in the Three Towns," in Ian Gunnison

- and Wendy James (eds.), *Essays in Sudan Ethnography*, London: C.Hurst and Company.
- Rosenzweig, M. R. and Kenneth I. Wolpin [1993], "Credit Market Constraints, Consumption Smoothing and the Accumulation of Durable Production Assets in Low-Income Countries: Investments in Bullocks in India," *Journal of Political Economy*, Vol.101, No.2, pp.223-244.
- Rosenzweig, M. R. and Oded Stark [1989], "Consumption Smoothing, Migration, and Marriage: Evidence from Rural India," *Journal of Political Economy*, Vol.97, No.4, pp.905-926.
- Rutherford, Stuart [2002], *Los Pobres y Su Dinero*, México: La Colmena Milenaria – Universidad Iberoamericana.
- Sadoulet, E. and A. de Janvry [1995], *Quantitative Development Policy Analysis*, Baltimore: John Hopkins University Press.
- Seligson, M. A. [1982], "Agrarian Reform in Costa Rica: The Impact of the Title Security Program," *Inter-American Economic Affairs*, Vol.35, No.4.
- Stiglitz, J. E. [1990], "Peer Monitoring and Credit Markets," *The World Bank Economic Review*, Vol.4, No.3, pp.351-366.
- Stiglitz, Joseph and Andrew Weiss [1981], "Credit Rationing in Markets with Imperfect Information," *American Economic Review*, Vol.71, No.3, pp.393-410.
- Stiglitz, Joseph and Andrew Weiss [1983], "Incentive Effects of Termination: Applications to the Credit and Labor Markets," *American Economic Review* Vol.73, No.5, pp.912-927.
- Tchuindjo, Leonard [1999], "The Evolution of an Informal Financial Institution: The Rotating Savings and Credit Association in Cameroon," *African Review of Money, Finance and Banking*, (supplementary issue of *Savings and Development* Vol.23), pp.5-20.
- Townsend, R. M. [1995] "Consumption Insurance: An Evaluation of Risk-Bearing Systems in Low-Income Economies." *Journal of Economic Perspectives*, Vol.9, No.3, pp.83-102.
- Time* [1967], "Brazil: A Lot of Car Buying by Lot," July 21.
- Udry, Christopher [1994], "Risk and Insurance in a Rural Credit Market: An Empirical Investigation in Northern Nigeria," *Review of Economic Studies*, Vol.61, No.3, pp.495-526.
- Vélez-Ibáñez, Carlos G. [1982], "Social Diversity, Commercialization, and Organizational Complexity of Urban Mexican/Chicano Rotating Credit Associations: Theoretical and Empirical Issues of Adaptation," *Human Organization*, Vol.41, No.2, pp.107-120.

Yunus, Muhammad [1997], *Hacia un Mundo sin Pobreza*, Barcelona: Editorial Andrés Bello.